鶴亭秀賀作

美津加賀見

丙寅孟春

上

へ13
3848
3

歌川國輝画

烏山寺禪第四輯

下巻

金松文庫

へ13
3848
4

美津加賀見

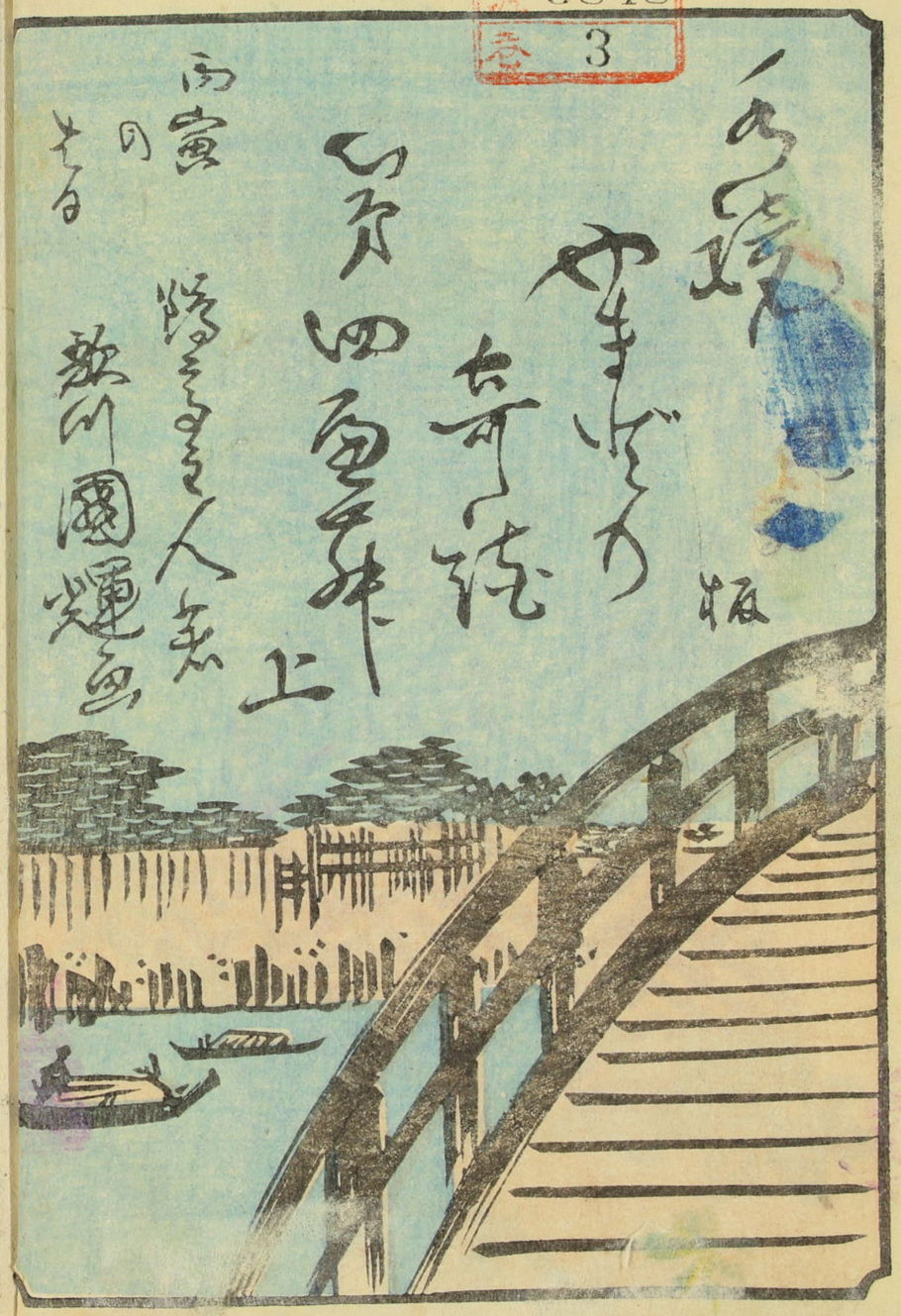
鶴亭秀賀作

丙寅

孟春

へ13
3848
3

門へ13
3848
巻3



水鏡山鳥奇談第三輯叙

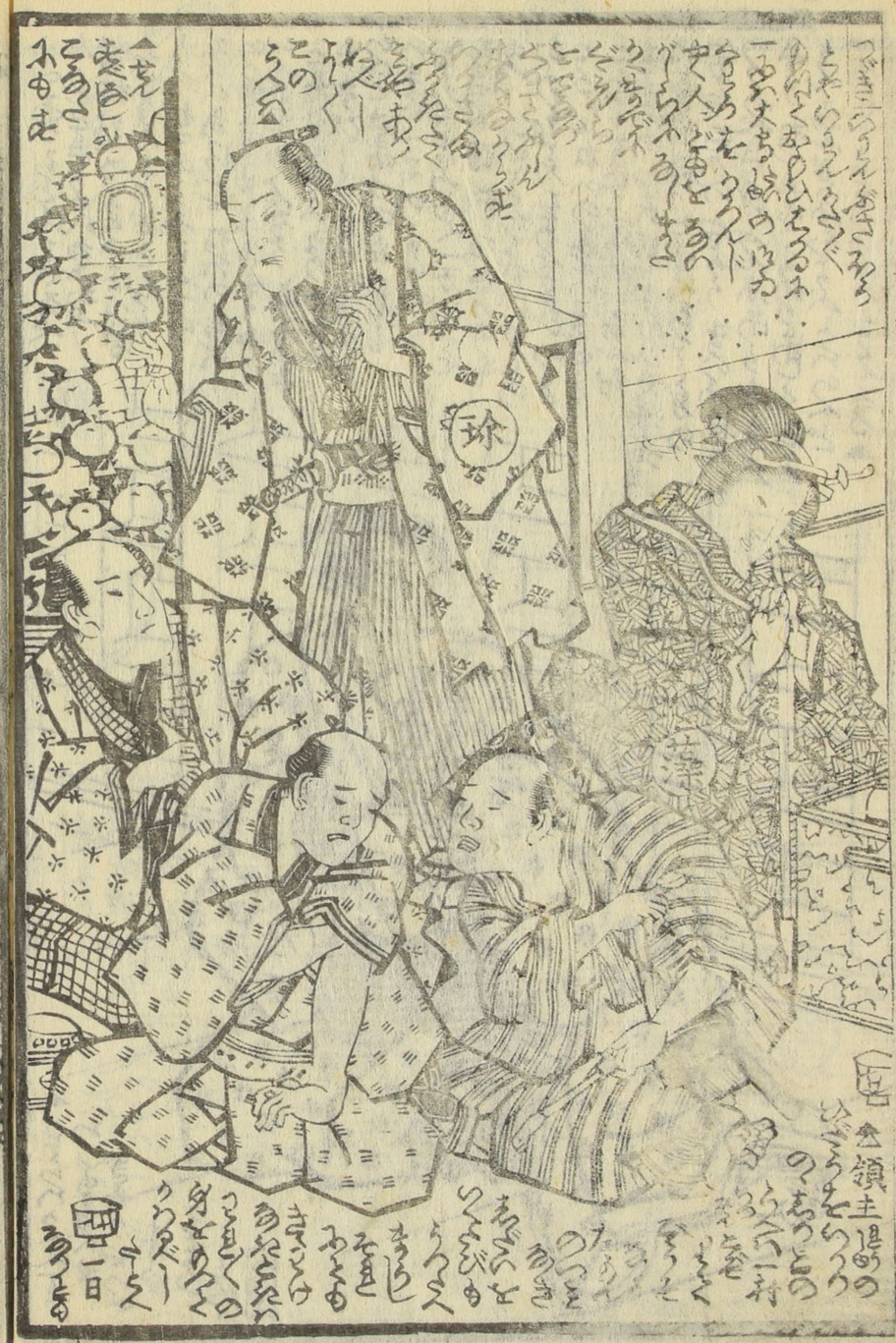
足引の山鷄ハ其ハ毛美ハ愛て水ハ映して終日得去ぢ心惚目眩きて竟ハ溺死せと張華ハ博物志ハ視て鳴呼愚哉山鳥邊鄙ハ産まと文武ハ富智男ハ勝ま實ま尾中の珠玉ろと心惚目眩きて邪を邪と悟ぢ竟ハ諸人の推貴むと喜慍一揆の揀選と成て真名を永世ハ胎ぢ譚も今や編重りて既ま三篇是ろ先ハ肝心要彼鶏の尾のいと永くして物語も此所面白き條下いろく共筆者ハ流々大團圓まで御退屈ま御覧あらバ南方難有幸ハ待らかしし

元治二龍
乙丑春発市

鶴亭秀賀識

弥生御前
天津太郎時員

左

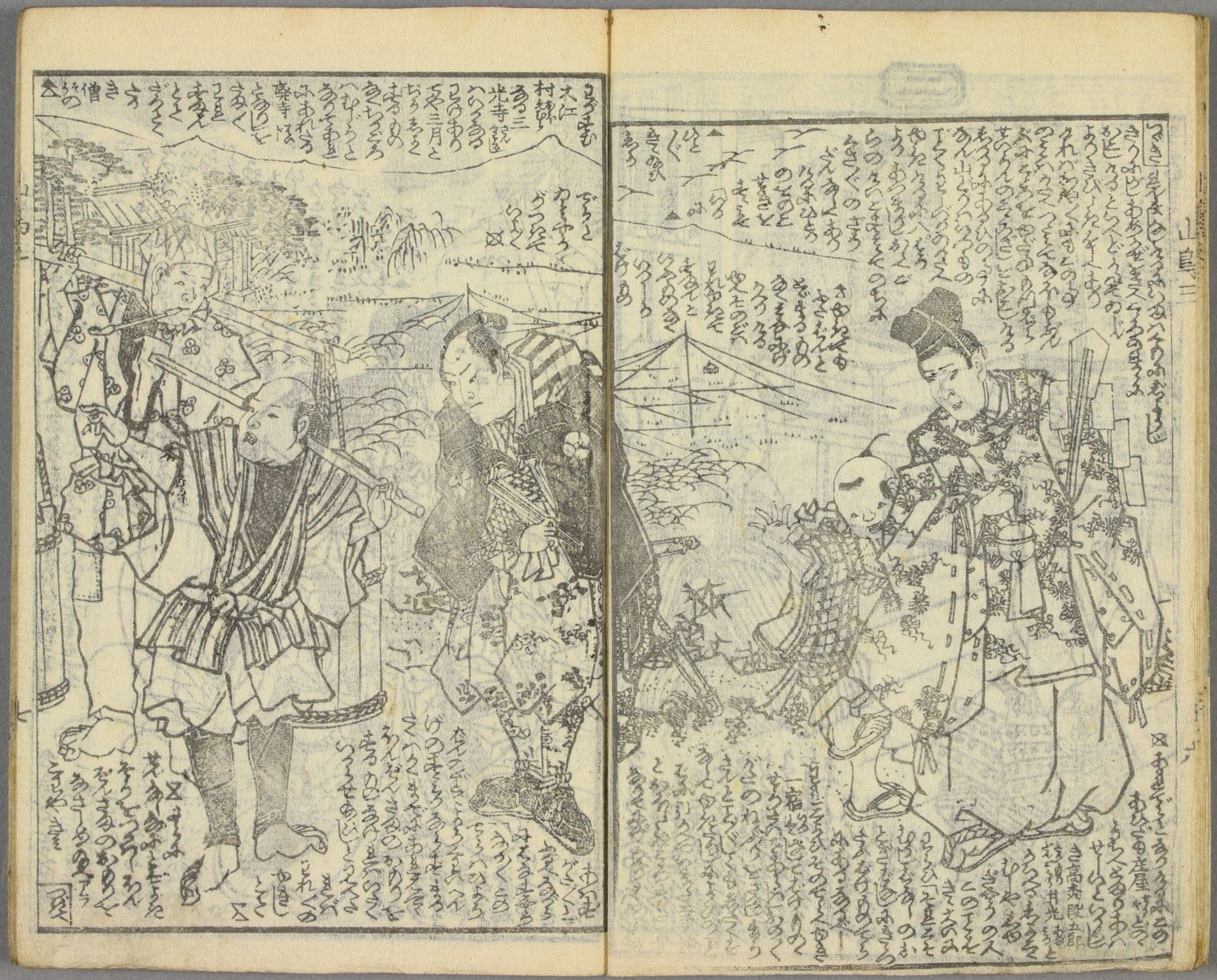


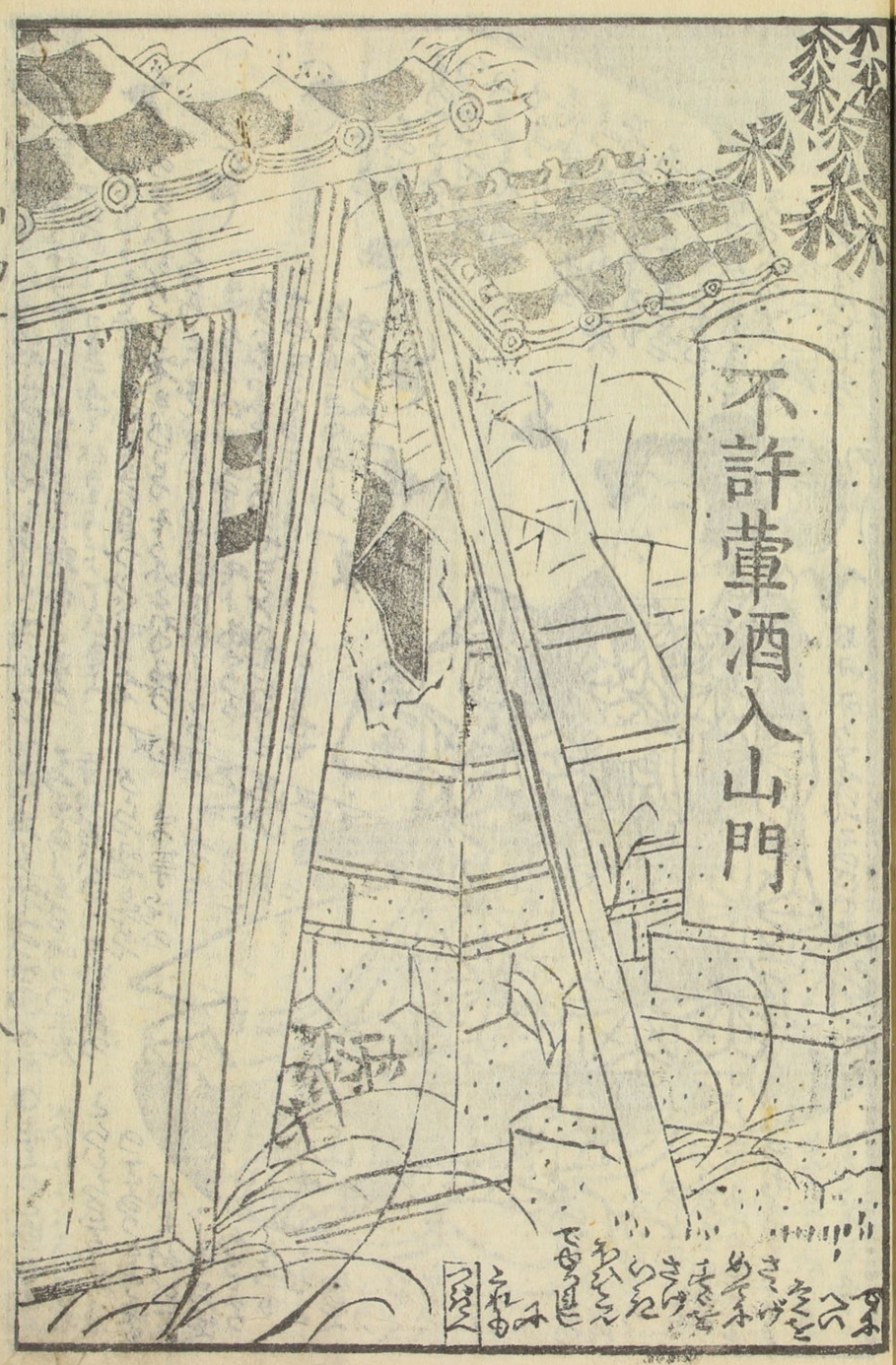
長枝京治公

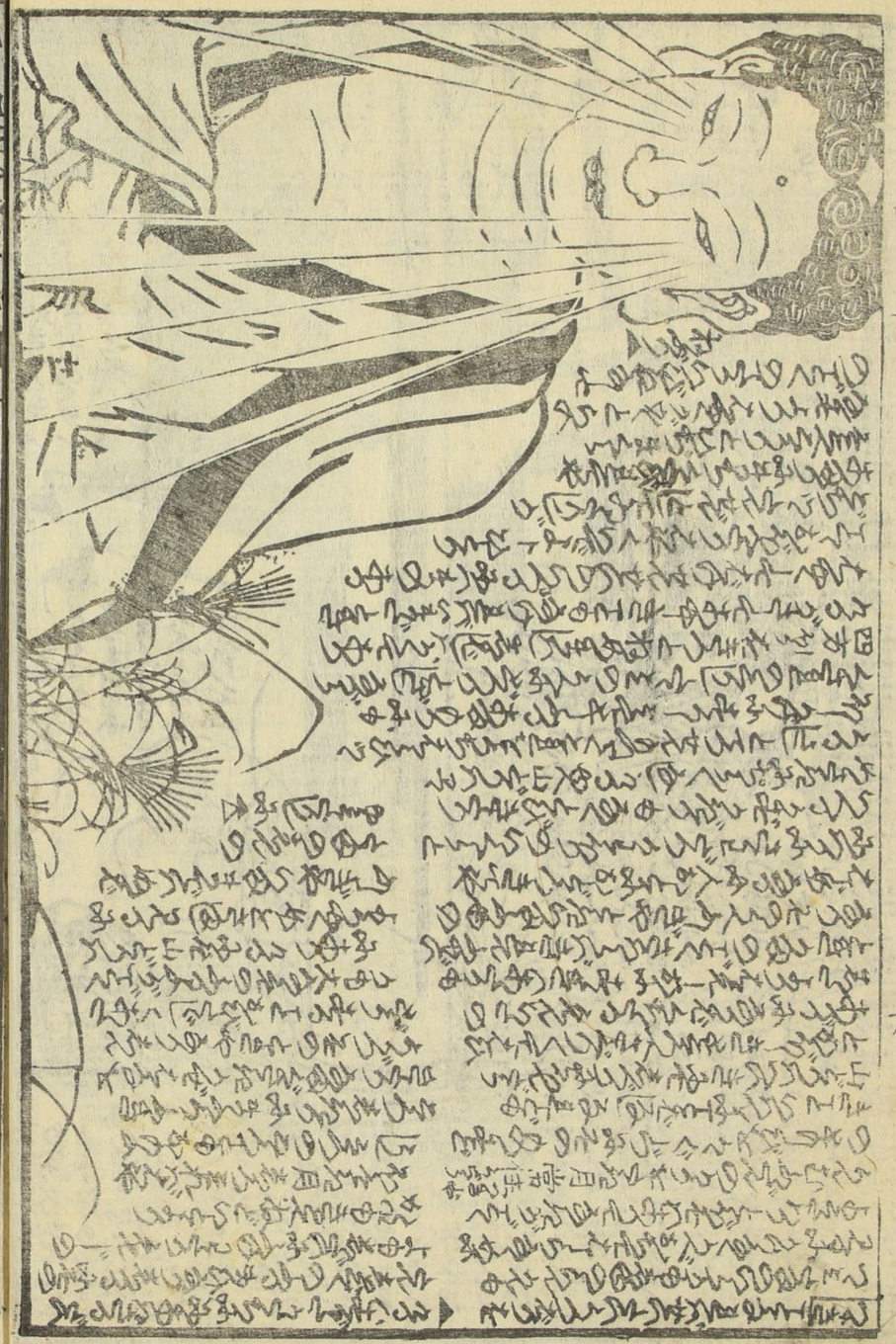
鳥屋晴太郎

雪輪巴之丞

二
山
重




不許葷酒入山門



秀賀著

國周画

重

山

山

重

つゞく

是へ左近之進の
昔物語り

就鳥
左

弥生御前

左
鶴

山
跡

美津加賀見山鳥奇譚第四編叙

凡戯述の評判とらくを視るの風の天門に跳り。飛鳥放下師の懐を出るの勢有て。實面白き奇々妙案。想へば其譚の似るべくもあらぬ我輩の史綴に、清女が妙言不知の似る。華を断んと想へ共鳥多の里の蝙蝠が。術を傳へ左近が傳記四篇ハ如何の催促の亦取上る盃のいと底浅き捜り作の開ぎ上加るの上總の侠客。椎岡舜天五郎浅川七五三等の譚を抱げ出し水滸の凝の鳴呼の所為だ義賊の談も支舊られば成丈新奇を穿んと飛ぎ趣向の條下ハ有とも。愚者の一得。水物語の其裡ハヤシヤの場所も些ハ在んの。次編発兒の其時々必求給へト自分勝手を欲張てまくへも

慶應二丙寅初春新鐫

鶴亭秀賀戯述

金華七變化 十七編より廿五編迄 鶴亭秀賀著作 梅蝶楼国貞画

右ハ殊の外御評判宜敷く作者重ねて一世一代の新案新工夫をこらしてふ慣ハ念を入て古今の美本と做し一ぐさ着官競て高覧をねがふ

水鏡山鳥奇談 四編秀賀作 五編国周画

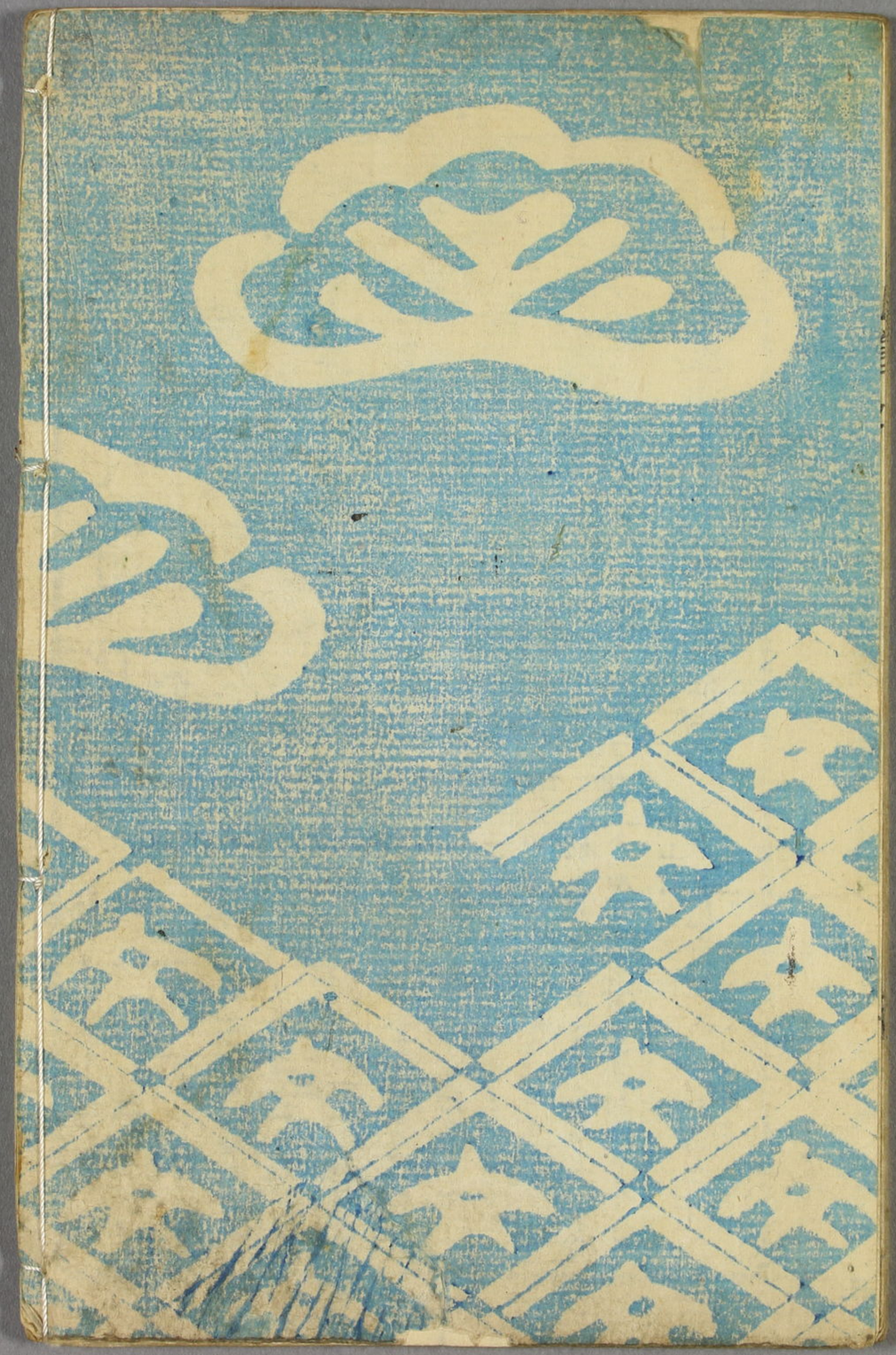
蓬莱鳴臺延壽盃 偶儡師 三編魯文作 四編国綱画

花の御所九重日記 初編より秀賀作 追々出版 国貞画

文 地本雙紙問屋 金松堂 横山町三丁目 辻岡屋文助梓

本製芝子油 日本橋通十軒店 絵双紙 武蔵屋勝之助

抑丁子油ハ和漢一の名品にして業の上ハ所切の諸病を治し其外日々の用ひ一時武蔵様に女中方肝要の業と成て是なくてハ叶ハぬ物と成て是なくてハ色彩よ成て是なくてハ色あくまつ髪の艶の元を出ハ要くハ本製よ求ハ



山鳥奇禪第四輯

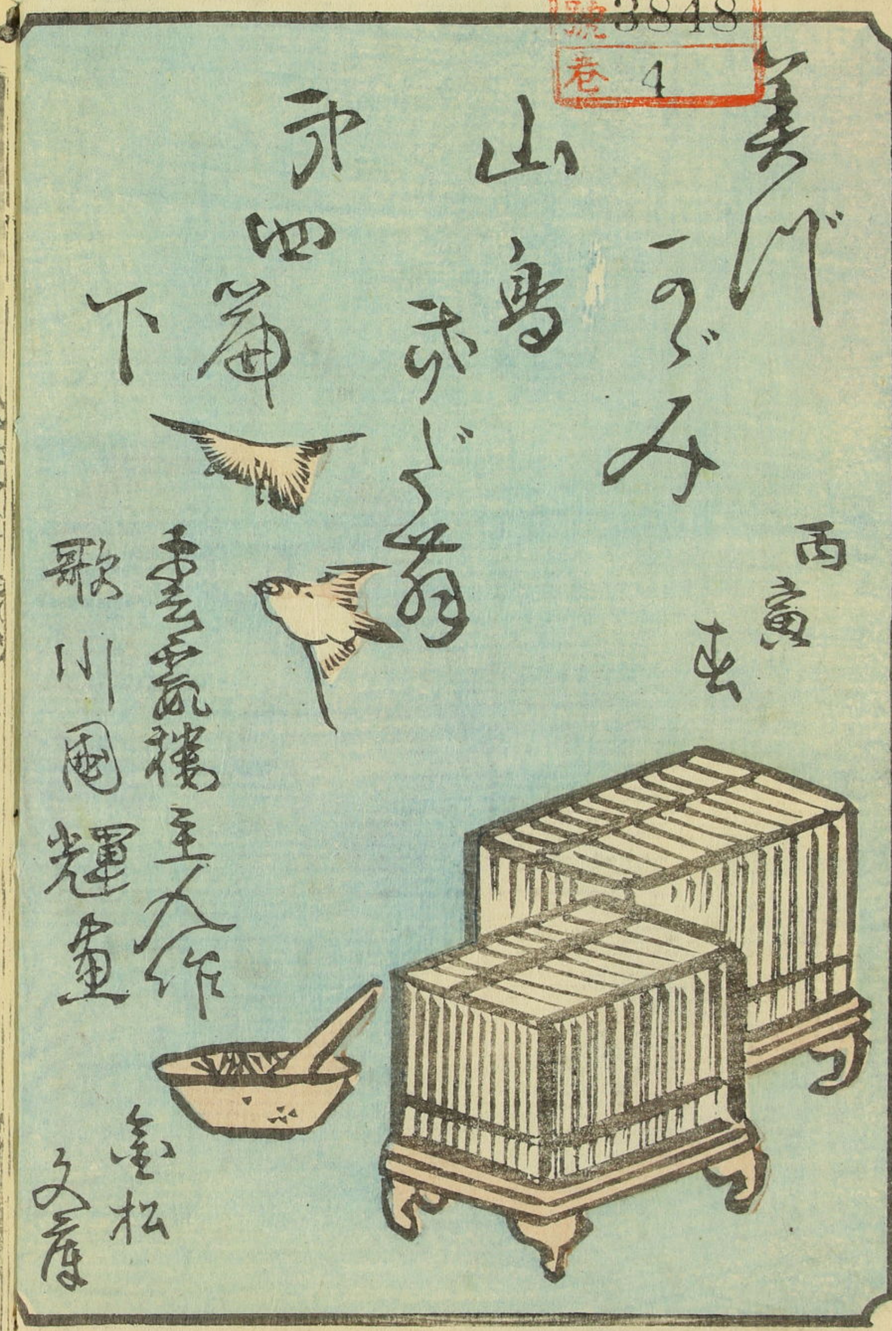
歌川國輝画

下巻

金松文庫

へ13
3848
4

門へ13
號3848
巻4



○渡邊左門の渾家
貞婦藻鹽
○長狹家の近臣
忍の部變次郎

三編下の巻かぐく

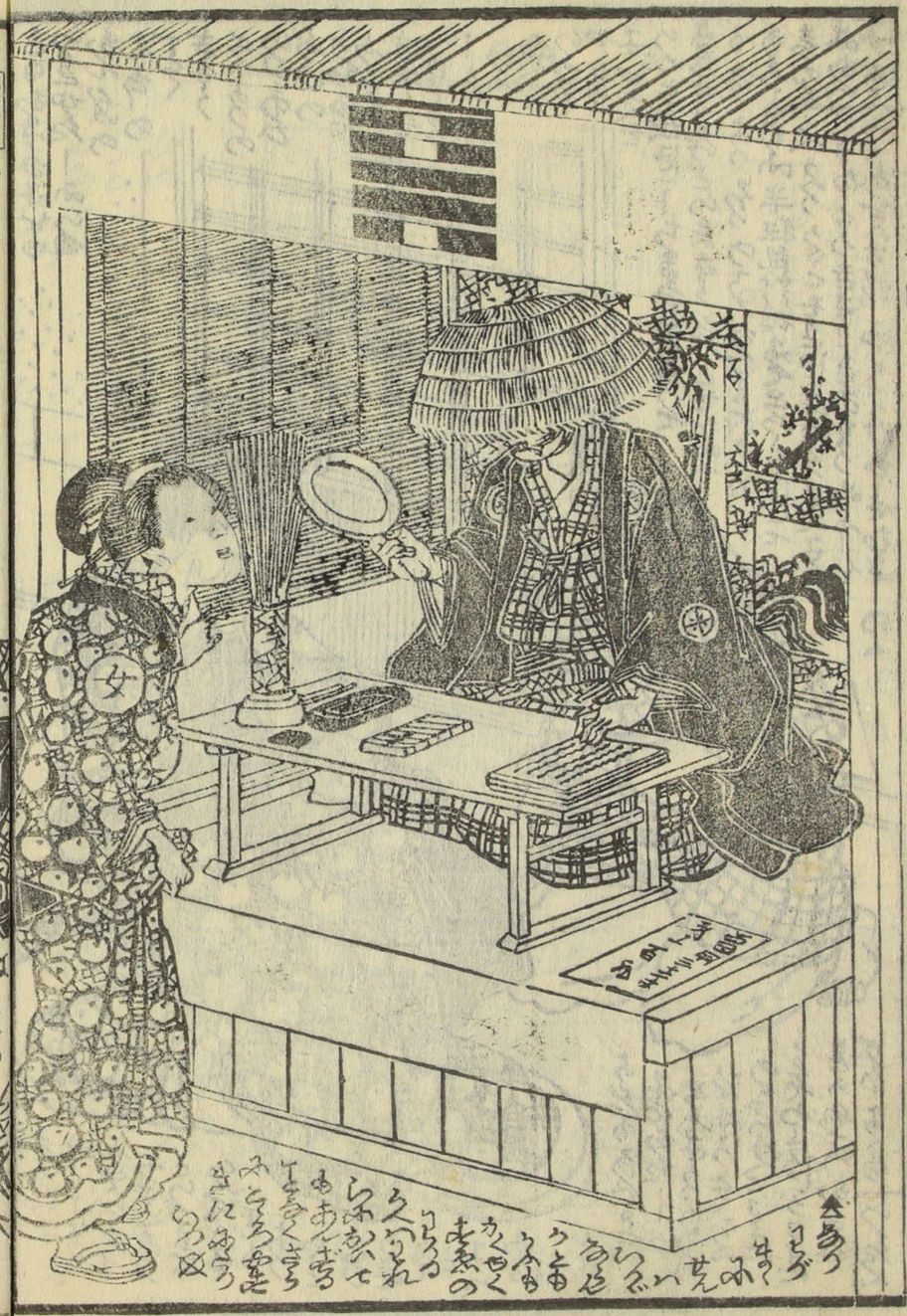
左
弥
山
鶴

弥
左
辺

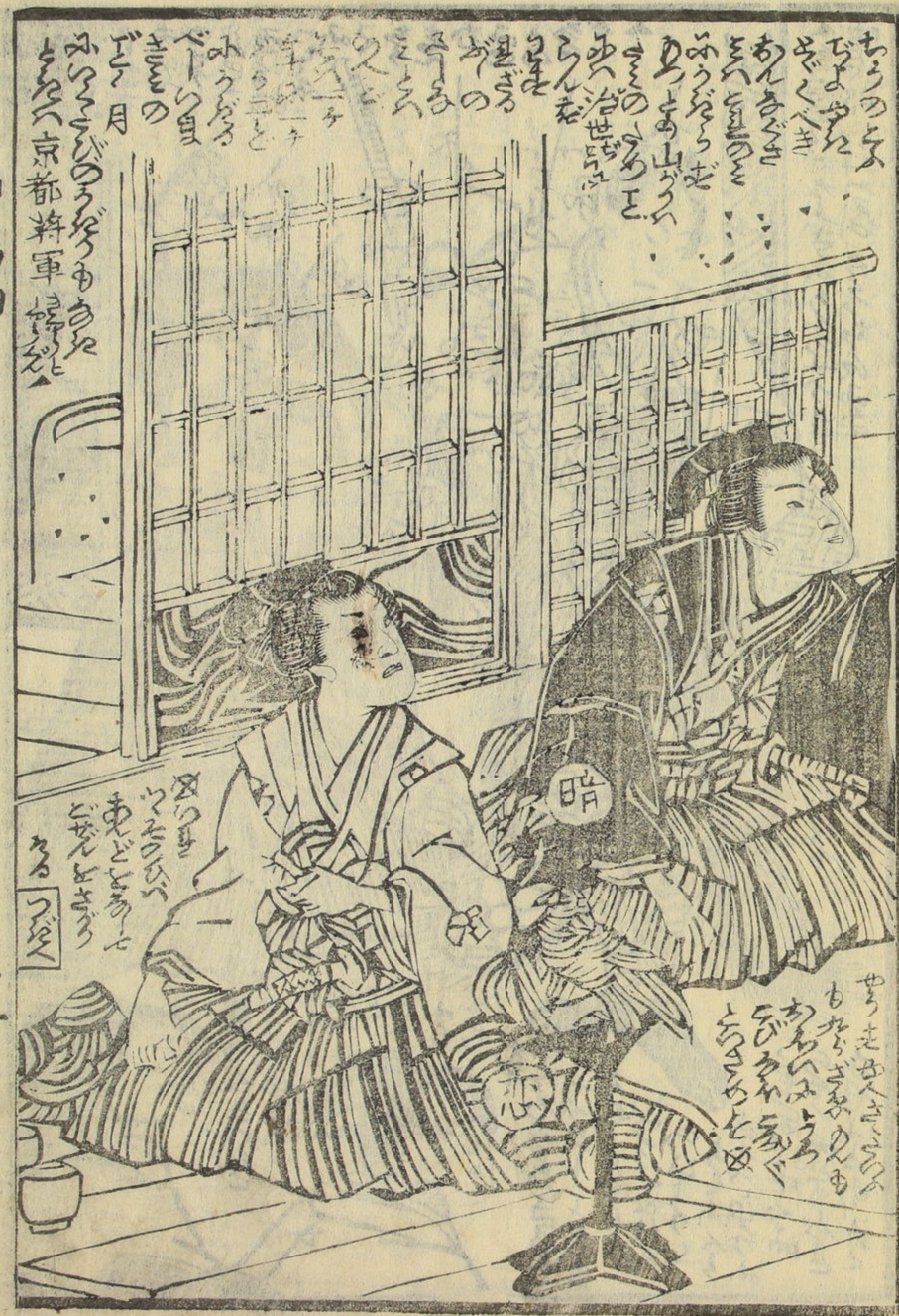
舞

左
巨

舞
女


女

秀賀作　國輝画



暗
宗
姫
史

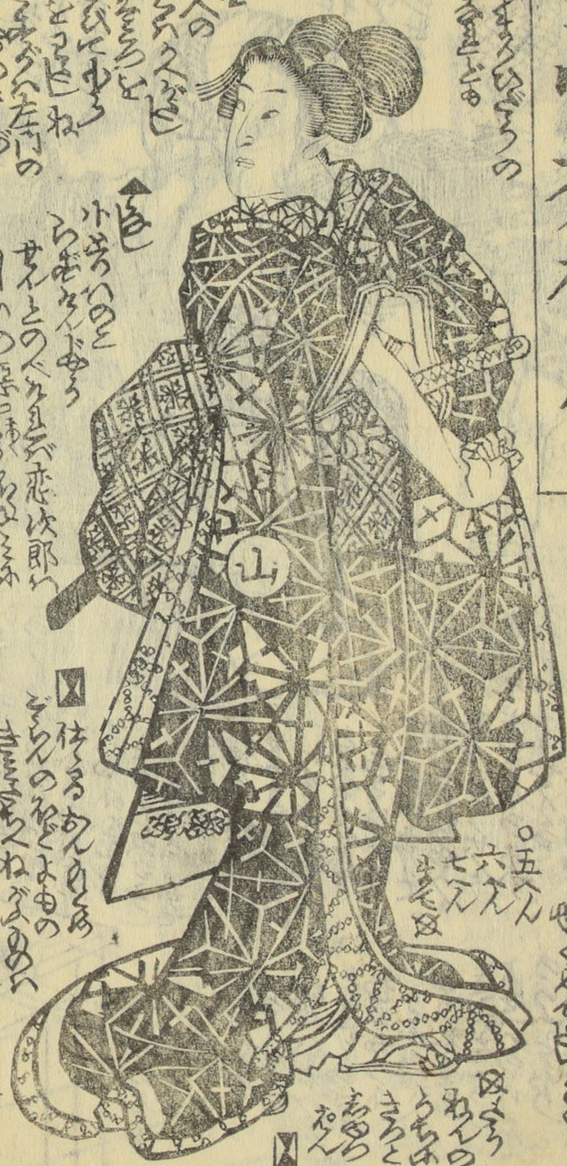
恋
巴

未詰
九
巴
つゞき

つゞき
天竺の里
暗
宗
赤

左門の老僕
喜六

鶴亭秀賀作



一雄齋國輝画

慶應二歳丙寅初春開版目録

武田膏 大貝百丸 小貝二十錠 中貝四十八錠

芳人形町通 敗毒三郎謹製

神仙 一角丸

氣ふき毒ヒ小兒五疳諸病ふせぎ

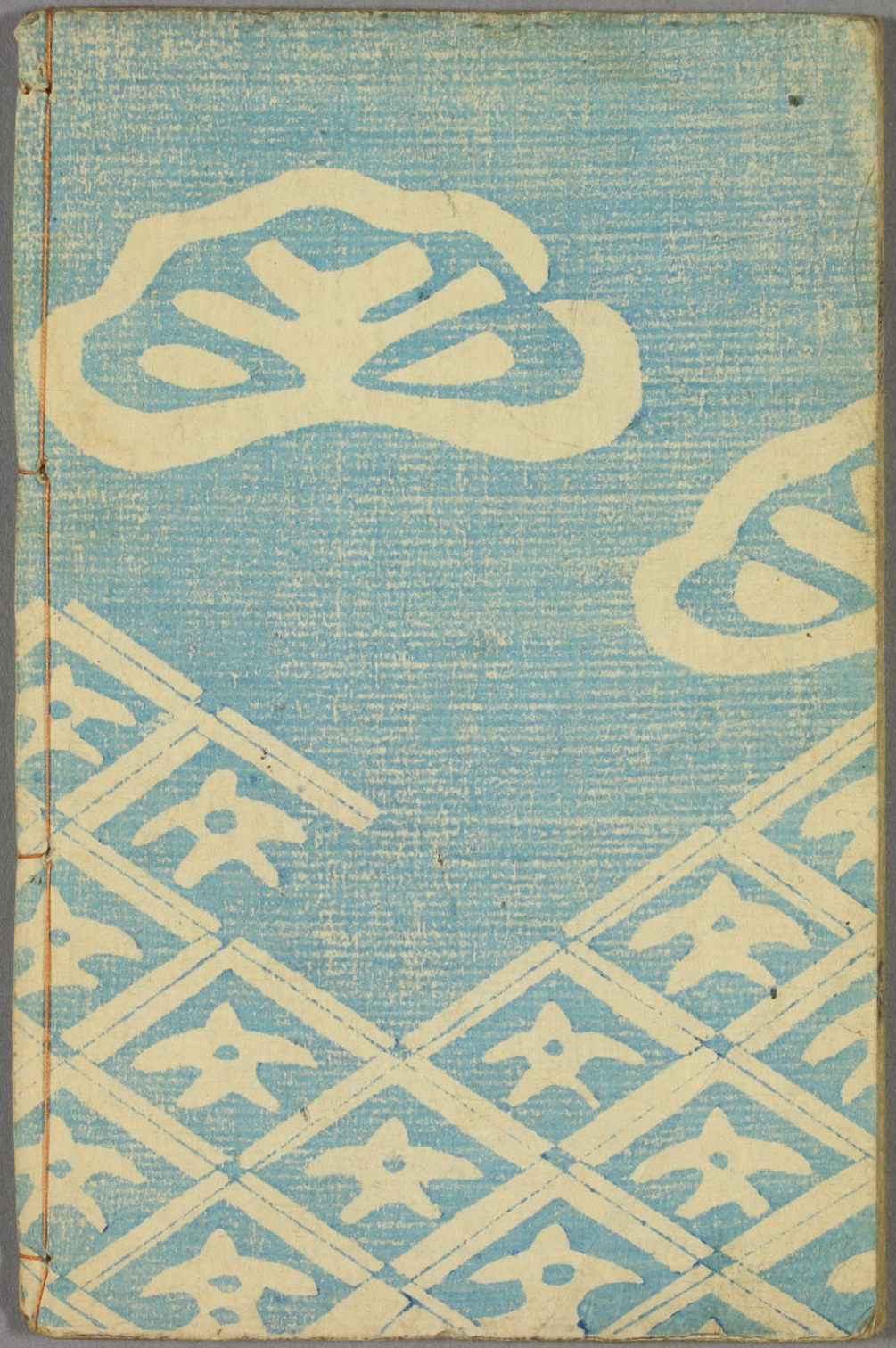
調合所 上總国 東金町 大野傳兵衛

周防深櫻模様 四編 貞雅作 五編 國貞画

梅春霞引始 三編 魯文作 讀切 國周画

濡衣女鳴神 十編 秀賀作 讀切 國貞画

假枕巽八景 二編 魯文作 讀切 國周画

道外江戸名所 大錦繪 五十枚 廣景画 續

仝 地本双紙 問屋 金松堂 横山町三丁目 辻岡屋文助梓